卯月の舞い

亡くなった親族の御霊を供養するために踊られる念仏踊り。ここ玉川の念仏踊りは、まだ、あどけなさの残る少女たちによって踊られ、見るものを引きつけて離さない不思議な魅力にあふれています。

毎年春の大寺薬師祭の四月三日と夏の八月十四日に新盆の家々をめぐり踊られる念仏踊り。その舞台となる南須釜の東福寺境内には「寛延元辰（一七四八）九月吉日念仏供養結衆敬白」という念仏供養塔があり、当初は十五、六歳の男女によって踊られていたことが知られています。さまざまな理由で昭和二十七年に途絶えていた踊りを大野ケサさんが再興させました。現在の踊りも、そのケサさんが大正四年（一九一五）12歳のときに踊った記憶をもとに再現され伝承されています。

念仏踊りの踊り子は7～12歳位までの少女で、約二十名ほどで構成されています。継承に関しては、以前は各地区ごとに世話人がいましたが、南須釜念仏踊保存会によって、踊りの指導や管理運営が行われています。

少女たちの衣装は、もとは元禄の小袖だったのが春は振袖、夏は浴衣で裾からげに膝までたくしあげて、その下に鮮やかな赤い蹴り出しと脚袢をのぞかせます。そして、たすきがけをして手甲、白足袋と草履をはき、花や切り紙で彩られた綺麗な妻折笠をかぶり、手には白扇子と綾竹をもち、踊りにあわせて使い分けます。